

初めての営業用白熱灯 鹿鳴館

- 住所
千代田区内幸町1丁目1-7
- 交通アクセス
東京メトロ
日比谷駅 A13番出口 120m

■日本で初めて営業用白熱灯を点灯

明治20年（1883）1月22日、鹿鳴館夜会において、東京電燈株式会社は、移動式発電機を用い、わが国初の営業用の白熱灯を点灯しました。

この点灯は、一般の人が初めて見たアーク灯による電気のひかり「東京銀座通電気燈」の点灯から5年後、また、当該地域が配電線により電気供給される前年のことでした。

ところで話が少し前後しますが、鹿鳴館においては、白熱灯点灯の4年前の開館時から、正面入口庭においてアーク灯が輝いていたことを補足させていただきます。

写真1は鹿鳴館の正面写真で、正面のタワー上部がアーク灯です。

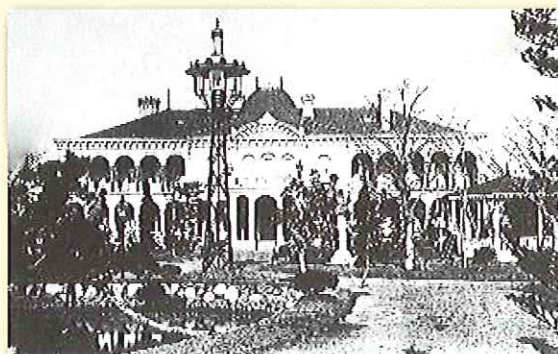


写真1 鹿鳴館と庭先のアーク灯
・明治20年の白熱灯点灯前、開館時に設置されたアーク灯です。
・電源には移動式発電機が用いられました。
日本建築学会図書館蔵

■当時の地図での場所

鹿鳴館の開館時の住所は内山下町です。

図1は、明治17年（1884）、鹿鳴館開館の翌年の地図で、鹿鳴館と記されており、赤丸のところにあります。正門（黒門）が南方向にあり、卵形の庭の奥に館（建物）があります。

南側の東京府庁は、明治元年（1868）、大和郡山藩柳沢家の上屋敷を改造して設けられました。東京都庁の開庁の地です。



図1 明治17年測量の地図
鹿鳴館の正門（黒門）が南西方向にあり、卵型の庭の奥に館があります
国土地理院発行地形図

■現在の状況

明治時代の地図（図1）を参考に、現在の地図（図2）において鹿鳴館の位置を追うと、外掘りが高速道路に、日比谷公園の東側に日比谷通りが造られるなどの変化はありますが、堀と道路の位置などから、赤丸のところにあります。

現地を訪ねたところ、鹿鳴館の館のあったところには、写真2のようなNBF日比谷ビル（旧大和生命ビル）が建っており、住所は千代田区内幸町1-1-7でした。



図2 現在の地図
鹿鳴館跡にはNBF日比谷ビル（旧大和生命ビル）が建っています

辺りを調べたところ、ビル前面広場の左側、駐車場入口との境の壁に、黒御影石製の「鹿鳴館跡」を示すプレートがありました。

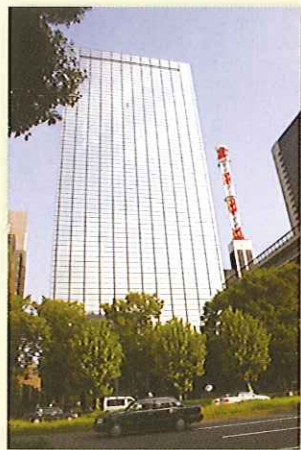


写真2 鹿鳴館跡に建つ
NBF日比谷ビル
・前面の道路は日比谷通り
・赤白の塔は東京電力本店



写真3 鹿鳴館跡を示すプレートの場所
ビル前面広場左側の側壁

次のような文章が刻まれていました。

「鹿鳴館跡 ここはもと薩摩の装束屋敷の跡であって、その黒門は戦前まで国宝であった。この中に明治十六年鹿鳴館が建てられ、いわゆる鹿鳴館時代の発祥地になった。千代田区」



写真4 プレート

■鹿鳴館について

鹿鳴館は、外務卿井上馨が、幕末開国時に列強諸国と結んだ屈辱的な不平等条約を改正交渉していくには、日本が文明国であることを外国に示す必要があると考え、欧化政策の一つとして建設を推進しました。

建物はレンガ2階建て、内部は開館式翌日の新聞記事(時事)によれば、「・・・この館は懇親会合のクラブ或いは賓客招待等の用に供するものにして、西洋風の芝紅葉館兼ホテルというべきものなり。正面の楼上に舞踏室あり、その左右に客間あり、楼下の東側に食堂あり、楼下の西

側北極端に球突部屋あり。その他寢室、応接所、湯殿等を合わせ部屋の数が240余あり・・・」と述べています。舞踏室は330m²ほどでした。

ところで、鹿鳴館が華やかだったのは開館からわずかに4年間ほどでした。必死のアピールの効果もなく、不平等条約の改正は遅々として進まず、明治20年(1887)に井上馨が外務大臣を失脚してからは、舞踏会も間遠になり、やがて人々から忘れられて表舞台への再登場はありませんでした。

そして、明治27年(1894)、明治東京地震で被災し、修復後、華族会館に払い下げられました。

大正12年(1923)の関東大震災にはよく耐えましたが、昭和2年(1927)に日本徴兵保険株式会社(後の旧大和生命)の手に渡り、昭和15年(1940)に太平洋戦争を前に解体されました。

その際に取り外された階段と壁紙の一部が東京大学建築科に保存されています。また、売却されたシャンデリアが、江戸川区の燈明寺に残され現在も使用されています。

<参考>東京都江戸東京博物館の文明開化ゾーンに、鹿鳴館の模型が常設展示されています。

■地図での明治40年と昭和10年の様子

図3は明治40年(1907)の地図で、鹿鳴館の場所は華族会館になっています。また、館の前にあった庭園は分割され銀行や台湾総督府出張所などになっています。

右上の電燈会社は東京電燈(現東京電力株)の前身)で、明治36年から大正14年までここにありました。右下の帝国五十二館は製品や産物の品評会を主催するところでした。

なお、青丸のところは、現東京電力本店ビルの場所です。*図4も同じ

図4は昭和10年(1935)の地図で、鹿鳴館の場所は日本徴兵保険会社(後の旧大和生命)になっています。

右下の政友会(本部)は、明治後期から昭和前期にいたる代表的な政党で、伊藤博文の主導で結成され、原敬、犬飼毅らが総裁を務めました。



図3 明治40年の地図
資料提供 (株)人文社



図4 昭和10年の地図
都市製図社蔵